

2 外部資金による研究

[概要]

外部資金の導入による研究の活発化については、歴博が追求している課題の一つである。代表的な競争的研究資金である日本学術振興会による科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）については、2025年度の新規採択件数は15件で、継続を含めた採択件数では34件、総額282,043千円であった（採択課題一覧参照）。この他、受託研究2件の外部資金を導入した研究があった。

共同研究担当 大串 潤児・小池 淳一・村木 二郎

[科学研究費助成事業採択課題一覧]

	研究種目	代表者氏名	研究課題名 ※実績報告は課題名のリンク（KAKEN）から参照ください。
新規	(1) 学術変革領域研究 (A)	後藤 真	歴史情報学の創成
	(2) 学術変革領域研究 (A)	川邊 咲子	歴史情報記録方法の高度化
	(3) 学術変革領域研究 (A)	天野 真志	歴史学研究成果の共有と「水平展開」
	(4) 学術変革領域研究 (A)	小風 尚樹	TEIを中心とした高度な歴史テキスト構築
	(5) 学術変革領域研究 (A)	後藤 真	歴史情報学理論の構築
	(6) 基盤研究 (A) (一般)	日高 薫	エジプト所在の日本美術品調査
	(7) 基盤研究 (A) (一般)	佐野 雅規	ストロンチウムと年輪酸素の精密な同位体地図に基づく木材の産地推定
	(8) 基盤研究 (A) (一般)	箱崎 真隆	未踏区域「縄文時代前期」に到達する酸素同位体比標準年輪曲線の構築
	(9) 基盤研究 (B) (一般)	山田 慎也	引き取り手のない死者の公的対応に関する文化的研究—誰もが安心して死を迎えるために
	(10) 基盤研究 (C) (一般)	内田 順子	女性作曲家・金井喜久子：越境する音楽とジェンダーの視点からの再評価
	(11) 基盤研究 (C) (一般)	鷲頭 桂	「桃山美術」史観の再構築—中近世移行期における伝統と革新の考証を通して—
	(12) 基盤研究 (C) (一般)	吉井 文美	国際企業としての開ラン鉱務総局と近代東アジア国際関係の再検討
	(13) 基盤研究 (C) (一般)	佐川 亨平	新出資料を用いた戦後炭鉱労働社会の比較研究
	(14) 挑戦的研究 (萌芽)	若木 重行	古代中国の失われた漆芸技法とその復元への挑戦
	(15) 若手研究	山下 優介	弥生・古墳時代の集落動態と洪水災害に関する考古学・年代学的研究
継続	(16) 学術変革領域研究 (A)	箱崎 真隆	日本列島域における古環境変遷の研究
	(17) 学術変革領域研究 (A) (公募研究)	佐野 雅規	年輪の酸素同位体比とストロンチウム同位体比を用いた木材の産地判別技術の開発
	(18) 学術変革領域研究 (A) (公募研究)	上 奈穂美	カラフトブタとは何か：オホーツク文化の家畜飼養の役割
	(19) 基盤研究 (A) (一般)	村木 二郎	中世東アジア海域の地域社会と琉球帝国—集落・信仰・技術—
	(20) 基盤研究 (A) (一般)	坂本 稔	高精度単年輪14C測定による弥生から古墳期の暦年較正の高解像度化

継続	(21) 基盤研究(B) (一般)	高田 貫太	航路・寄港地から見た倭と古代朝鮮の交渉史に関する日韓共同研究
	(22) 基盤研究(B) (一般)	松田 陸彦	朝鮮海出漁資料からみた植民地社会の実態研究
	(23) 基盤研究(B) (一般)	工藤 航平	歴史学研究者アーカイブズの研究資源化とプラットフォーム構築
	(24) 基盤研究(B) (一般)	三上 喜孝	古代東アジアの金石文にみる宗教文化の展開と地域社会
	(25) 基盤研究(B) (一般)	土山 祐之	気候変動や自然災害に基づく中世民衆生活史像の再構築
	(26) 基盤研究(B) (一般)	若木 重行	先端的同位体分析手法によって読み解く第四紀の海洋Sr循環ダイナミクス
	(27) 基盤研究(C) (一般)	小池 淳一	口頭伝承資料の分析と多角的発信・活用に関する研究
	(28) 基盤研究(C) (一般)	樋浦 郷子	非就学者層に着目してえがく植民地期朝鮮の教育史
	(29) 基盤研究(C) (一般)	福岡万里子	幕末明治初期「不平等条約」形成過程の多国籍史料に基づく再検討
	(30) 基盤研究(C) (一般)	林部 均	都城の生活史—その成立により何が起こったのか—
	(31) 若手研究	賀 申杰	1900～1910年代日本の艦船輸出の性格構造—外需形成と武器移転の視点から
	(32) 若手研究	Morris James	Syriac Christianity, Syriac Studies and Modern Japan: An Intellectual History
	(33) 研究活動スタート支援	平峰玲緒奈	考古遺跡中の漂着軽石に基づく海域火山の噴火履歴解明の試み
	(34) 特別研究員奨励費	大場 あや	東アジアにおける葬制の変容メカニズムの比較研究—国家政策と地域的受容の観点から—
延長	(35) 研究活動スタート支援	三輪 仁美	日本古代の私撰史書『日本紀略』の史料学的研究

[その他の外部資金による研究]

	委託者・連携機関等	代表者氏名	研究課題名
受託研究	(1) 一般財団法人冠婚葬祭文化振興財団冠婚葬祭総合研究所	山田 慎也	冠婚葬祭とメディアに関する研究
	(2) 国立大学法人東海国立大学機構 (名古屋大学宇宙地球環境研究所)	坂本 稔	「宇宙地球環境科学と歴史学・考古学を結ぶ超学際ネットワーク形成」(共同利用・共同研究システム形成事業～学際領域展開ハブ形成プログラム～)

【受託研究】

(1) 冠婚葬祭総合研究所「冠婚葬祭と情報化に関する研究」

(研究代表者 山田 慎也)

1. 目的

第3期では情報化という観点から冠婚葬祭の変遷について検討を行ってきた。新型コロナウイルス感染症の流行により、インターネット上のリモート結婚式や葬儀、法要などのデジタル情報技術の利用が試みられたが、冠婚葬祭を取り巻く状況はこれに留まらず、インターネットを利用した故人の紹介や追悼、契約や企画販売、また儀礼知識の情報流通などによって、情報化は歴史的にも冠婚葬祭に多大な影響を与えていることが明らかになった。

これらの成果を踏まえ、さらに検討が必要なのは冠婚葬祭におけるメディアの役割である。人々が冠婚葬祭を実践し受け継いでいくなかでメディアの役割は大きく、また社会の変化によってそのメディアの特質も変化している。個人化が進む現代社会において、どのようなメディアを通して、どのような冠婚葬祭が人々の中で受容され、実践されていくのかは重要な課題である。

さらには、人々のつながりを作るためのメディアとしての冠婚葬祭自体が現在大きく変質しているともいえる。こうした人々の紐帯をつくるためのメディアとしての儀礼文化の検討も歴史的展開を踏まえ必要となっている。そこで今回は冠婚葬祭とメディアの関係を通して、人々の紐帯を作り出す様相についてを歴史的経緯を踏まえて検討し、今後の儀礼文化の展開を検討するものである。

2. 今年度の研究計画

冠婚葬祭とメディアの関係を通して、人々の紐帯を作り出す様相について歴史的経緯を踏まえて検討し、今後の儀礼文化の展開を検討するものである。今年度はプロジェクトの第1年目であり、まずはメディアの利用により、死者儀礼や追悼がどのように影響を受けていったかを検討する。

3. 今年度の研究経過

今年度は、本館収蔵資料の『明譽眞月大姉葬儀写真帖』を素材に検討を行った。遺影などの写真メディアは死者儀礼において重要な位置を占めるようになってきている。こうした写真の利用について、近代に葬儀写真集の作成が流行しており、この葬儀記録写真帳もその一つであることが指摘できる。この『明譽眞月大姉葬儀写真帖』では、蓮華の造花など圧倒的な量の供物と、その贈主である魚河岸の間屋や多くの名だたる歌舞伎役者などのものを連続して掲載することで、葬儀の偉容を示し、また詞書きにより現世の成功と来世の菩提といった二世の安楽を願ったことで、故人の追悼を写真集という形で作り上げていることが明らかとなった。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎山田 慎也 本館研究部・教授

土居 浩 ものづくり大学教養教育センター・教授

田中 大介 自治医科大学医学部・教授

小谷みどり シニア生活文化研究所・代表理事

問芝 志保 東北大学大学院文学研究科・准教授

瓜生 大輔 芝浦工業大学デザイン工学部・准教授

大道 晴香 國學院大學神道文化学部・准教授

宮澤 安紀 國學院大學研究開発推進機構・研究員

大場 あや 日本学術振興会・特別研究員

武井 謙悟 武蔵野大学仏教文化研究所・特別研究員

(2) 共同利用・共同研究システム形成事業「学際領域展開ハブ形成プログラム」宇宙地球環境科学と歴史学・考古学を結ぶ超学際ネットワーク形成

(中核機関：名古屋大学宇宙地球環境研究所)

激甚災害と年代測定グループ

～太陽・地球の激甚イベント探査と新しい高精度年代法の発展～ 2024～2033年度

1. 目 的

名古屋大学宇宙地球環境研究所（ISEE）を中核機関とし、国立歴史民俗博物館（歴博）、山形大学、九州大学、情報・システム研究機構、名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センターの5参画機関と連携して、宇宙地球環境科学と歴史学・考古学を融合する新しい超学際ネットワークを創成する。これにより、激甚太陽嵐の現代文明への影響の評価、新しい正確な年代決定による歴史学・考古学の展開を進め、宇宙に拡大する持続的な発展型社会の形成と宇宙災害や地震火山災害への備えに貢献するとともに、次世代を担う国際人材を育成する。

大学共同利用機関である歴博は、国内外の大学や博物館、地方自治体（特に文化財研究機関・組織）などと広範なネットワークを有し、炭素14年代法および年輪年代法による「超高精度年代研究」を実践して、歴史学や考古学における歴史叙述の精確度向上を牽引している。ISEEとの連携により、宇宙科学・地球科学と歴史学・考古学との文理融合型超学際研究を推進する。

- ・樹木年輪の炭素14および酸素18分析による完新世（過去約1万2千年）の太陽活動と気候変動の復元
- ・太陽活動の急変を示唆する「炭素14スパイク」の検出と、それを年代測定に応用した炭素14スパイクマッチ法による極端災害や極端気候の発生年の特定
- ・歴史学・考古学と協働した極端災害の影響評価
- ・文献史学と協働した過去の太陽観測記録

2. 今年度の事業

ISEEと本館、山形大学高感度加速器質量分析センターが連携する「激甚災害と年代測定グループ」は定例のオンラインミーティングを開催して、情報共有を進めた。加えて今年度、ISEEと本館が学術交流・協力に関する基本協定書を締結し、一層の連携強化を図った。また、特任研究員として平峰玲緒奈氏を採用し、本事業による研究を推進した。平峰氏は参画機関や関連機関（高知大学海洋コア総合研究センター）に滞在して研究に従事し、本事業の学際ハブとしての機能を充実させた。

完新世における世界最大の噴火として知られる鬼界アカホヤ噴火は、南日本の縄文文化に壊滅的な影響を与えたとされる。その年代を、炭素14スパイクマッチ法を用いて誤差0年で判定することを目的とした樹木年輪資料の調査・採取を、屋久島で実施した。試験的な炭素14年代測定により、資料は紀元前5,000年代の炭素14スパイクを含む可能性があることが示唆された。今後、年輪1層ずつの炭素14年代測定からスパイクを検出し、噴火年代とされる樹皮直下の年代を判定する計画である。

学会およびシンポジウムにおいて、本事業に関わる講演を複数回行い、本事業の成果報告に努めた（JpGU：佐野（招待）、日本文化財科学会第42回大会：箱崎・佐野、人文機構シンポ：平峰）。

5. 研究組織（◎は担当責任者）

- ◎三宅 美沙 名古屋大学宇宙地球環境研究所宇宙線研究部・准教授
 箱崎 真隆 本館研究部・准教授
 南 雅代 名古屋大学宇宙地球環境研究所宇宙線研究部・教授・副所長
 坂本 稔 本館研究部・教授
 門叶 冬樹 山形大学高感度加速器質量分析センター・教授・センター長
 佐野 雅規 本館研究部・特任准教授
 山下 優介 本館研究部・テニユアトラック助教
 土山 祐之 本館研究部・テニユアトラック助教
 平峰玲緒奈 本館研究部・特任研究員